

第 3 章

高岡短期大学の 成熟期

宮本匡章第2代学長の時代、平成7年4月に、1年制の専攻科が2年制の専攻科に改組された。産業造形専攻、産業デザイン専攻、地域ビジネス専攻の3専攻が設置され、学生は、造形、デザイン、ビジネスのそれぞれの専門をより深く習得する教育体制が整えられた。この2年制専攻科の修了時には、学士の称号を取得できることとなった。私たちは、短期大学2年、専攻科2年の教育体制は、高等教育における新しい実践的な教育の方向性を示すものとして、その成果を地域に還元し、あわせて地域文化の向上に寄与できるものであるとの確信を持った。

横山保初代学長は、これからの大学の使命は、教育・研究とともに地域住民への大学開放活動にあるといろんな会議の場で発言されていた。その発言をもとに昭和61年度から大学の開放活動が開始された。大学開放の活動には、公開講座、作品展示公開、公開講演会等が開催された。しかも、年を経るごとに公開講座や展示公開の回数も増え活気がみなぎり、地域との交流も深まりをみせた。また、学外での展示公開、講演会や交流会も多くなり開放活動の成果が現れてきている。

高岡短大での思い出



第2代学長 宮本匡章

平成4年4月1日から平成10年3月末までの6年間、2代目の学長として高岡短期大学に勤務した。その高岡短大については、誠に妙な縁で、創設の構想段階から大凡の概要を知らされていた。というのも、私が大阪大学経済学部の教授になった当初から、月1回関西の企業のトップ数人が集まる横山ゼミ(初代学長の故・横山保先生(平成8年7月30日死去))に参加していたのであるが、その研究会で横山先生が私にも、短大の構想案や二上地区のキャンパス写真などを見せておられたからである。

とはいえ、私が学長になるとは夢想だにしていなかった。全くそれらしい話がなかったわけではないが、私なりに適任者を推薦していたので、よもや指名されるとは考えていなかった。ところが、学部ゼミの最中に電話で呼び出され、選挙で決まったから拒否するな、教授会のメンバーが最終決定のために待っている、と即決を求められて高岡に着任することになった次第。

今から振り返ってみても、良くぞ勤まったなというのが、第一の感慨である。それに加えて、苦楽を共にした短大教職員や大学関係者の皆さんとの懐かしい思い出が、次々と思い出されて胸が一杯になる。そのなかの幾つかを、以下で紹介することにした。

最初に経験した大きなイベントは、平成5年10月の開学10周年記念事業であった。着任した時には既にラフな企画ができており、その詰めの作業と実行とが私の仕事であった。恐らく別の箇所で紹介されているであろう記念事業を、なんとか無事にこなし、ホッとしたのを鮮明に記憶している。

次の、恐らく最大の仕事は専攻科の改組であった。平成6年6月に、既存の1年制の専攻科(定員10人)を、2年制の地域産業専攻科(産業造形14人、総合デザイン5人、地域ビジネス6人、の定員25人)に拡充改組することを申請し、学位授与機構の認定校として平成7年4月に設置をみた。それに伴い、本校舎と同様に当時の文部

省の文教施設部直轄事業として、平成9年3月専攻科棟が完成。それによって高岡短大の現状がほぼ確定したのであった。

大学の周辺には、4年制大学への昇格が強い希望として渦巻いていた。しかし文部省の関係者、とりわけ設置時に苦勞された方々は、高岡短大が多くの短大のモデル校として設置されたことを根拠に、4年制大学への移行は論外であるとの態度。その上、専攻科の改組についても、管轄の専門教育課短大係は、決して良い顔をしなかった。にもかかわらず、実現にこぎつけたられたのは、当時の佐藤禎二・審議官や本間政雄・専門教育課長の尽力と、冷たい仕打ちにも耐え、真剣に学位授与機構への書類作りに取り組み、忍耐強く持続的に折衝を行なってくれた関係教官や事務局幹部の努力の賜物であった。今でも、心から感謝している。

一方、楽しみが味わえる仕事もあった。海外の大学等との学術交流協定の締結である。その相手の一つは、大連外国語学院(平成8年11月19日、協定締結)で、産業情報学科ビジネス外語専攻・中国コースの学生を、単位の取得が可能な約2週間の短期語学研修に参加させるためであった。その二は、フィンランドのラハティ・ポリテクニク(平成9年11月5日、協定締結)で、産業工芸学科の学生や教員の交流を意図していた。いずれのケースも、立派な仲介役が居られたことが幸いし、中国とフィンランドに当時の事業課長(中国には岡田文之助先生が同行)と一緒に出かけ、協定書に調印することができた。

現時点でも高岡短大と両校との学術交流が続き、当時想定していた成果を挙げていると聴き、大変嬉しく思っている。海外出張したのは、いずれも酷寒の時期、しかも限られた日程であったが、それでも知らない土地への旅は、魅力的で刺激に富み、リフレッシュする絶好の機会となった。

その他にも、学外の著名人とご一緒できる、幸せな機

平成5年(1993)

主なできごと

(3.19)平成4年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行。(4.8)平成5年度入学式を挙行。(8.3)前学長横山 保氏から横山賞創設の寄附金が贈呈される。(10.1)開学10周年記念事業を実施。(記念植樹、記念モニュメント「堯」の除幕式、記念講演、記念式典、記念祝賀会、記念展)

会があった。何回かの公開講座や、毎年実施していた北日本テレビでのテレビ放送講座がそのチャンスで、少なからず役得を感じたものである。私の場合、文楽の人間国宝・吉田蓑助師匠と、将棋の米長邦雄永世棋世のお二人が、鮮烈な印象として残っている双壁といえる。

その高岡短大から離れて早くも7年。昨年の平成15年の夏頃から、その高岡短大や高岡が、物理的には近いところに居りながら、なにか遠い世界のように思えるようになってきている。平成15年6月、極めて残念なことに、後任の蠟山昌一学長が、任期を全うすることなく他界した。彼が東京大学助手から大阪大学に赴任してきて以来、公私いずれの場面でも自然と補完し合える関係にあり、まるで兄弟であるかのように付き合ってきただけ

に、喪失感は絶大なものであった。その同じ年の秋、高岡時代はもちろんのこと、金沢に来ても家族の一員として付き合いしてきた、そして短大関係者が少なからずお世話になった「博美」のママ(佐藤みよ子)が、突然に死去。正にダブルパンチ。一年以上経過していても、無念の思いは消えるどころか、増幅してくるように思える。

とはいえ、私が生きている限り、高岡や高岡短大の名を忘れ去ることはないであろう。本年10月に予定されている3大学の合併で、たとえ高岡短期大学の名称が消えようとも、創設に心血を注ぎ、開学以来今日まで維持発展のために尽力されてきた、多数の関係者の皆さんの高き理想と熱き情熱は、永遠に消えることなく持続し続けるものと信じている。

漆塗りの箸置

「学校とは学生が自分で力をつけるところである」ということをイヤというほど身にしみて思い知らされたことが高岡短期大学での一番の思い出です。

工芸の先生方をお願いして、いろんな物づくりを教えてもらいました。

漆工芸の先生には漆塗りの箸置き作りを教えてほしいと言いました。「材料は何で?」との先生の間への私の「鶏の脚の形と大きさが箸置きに具合がよさそうなので…」との答に先生はチョット驚かれたようでしたが「漆を塗るためには骨から徹底的に油を抜かなくては駄目ですよ」との条件付きで鶏の骨の箸置き作りを指導してもらえようになりました。

指導してもらえるようになった…とは言うものの先生はほとんど何も教えてくれませんでした。

先生は漆塗りの用具を前にして「これが漆で、これが漆の溶き油そしてこれが漆塗りの筆です。そして漆は重ね塗りが必要だけど箸置きなら3回塗ればいいでしょう」と言いつつ「こうやって漆を油で溶いて、この筆で

こんなふうにできるだけ薄く塗ればいいのです」と実演して見せてくれたあとは「塗ったあとは1週間ぐらい乾燥させましょう」と言っただけで部屋に私を残したまま出て行ってしまわれました。それ以降、先生の口から出たのはほとんど「これは失敗です。塗り直しです」という言葉だけでした。

私の漆塗り初挑戦は失敗の連続でした。

1回目「これは漆を厚く塗り過ぎています。塗り直しですね」

2回目「漆に埃がついてしまいました。塗り直して埃が付かないように乾燥させるように工夫しないといけませんね。塗り直しです」

3回目「漆を薄く塗るために油を使いすぎましたね。塗り直しです」

3回塗ればいいはずの箸置きが6回塗ることでヤットできあがりしました。失敗するたびに塗り損なった漆をサンドペーパーで削らなくてはならなかったので倍以上の手間がかかりました。

完成したとき先生に尋ねました。



第4代副学長 大谷利治

平成6年(1994)

主なできごと

(3.18)平成5年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行。(4.8)平成6年度入学式を挙行。

「僕は色んな失敗をしましたが漆塗りの主な失敗にはどんなことがあるのですか」

「あなたがやった三つです。その失敗をしなくなれば漆塗りは卒業です。僕もその失敗を今でもすることがあります」

先生の失敗と私の失敗とはレベルが全く違いますが私は3回の失敗のお陰で先生の指導がなくても今すぐにも自分用の箸置きなら漆塗りができる自信があります。塗りの巧拙を問わなければであることはもちろんですが…

金属工芸の先生方には鑄金のビールのジョッキ型のキーホルダーの飾り物作りや白銀製の掏摸出しリングなどを教えてもらいました。それなりの作品が完成したように思います。しかし、それらの作品は要所々は先生が手出しをしてくれてしまったので私には鑄金や鍛金などの技量は何も身につけていません。

工芸学科の先生方は「今は短時間でいろんなことを教えてやらなくてはならないので、失敗をさせている時間がないので学生達が可哀そうだ」と嘆いておられました。

公開講座をのぞいたとき鑄金の先生が次のような話をしておられました。

私は卒業制作で「学校でなければ挑戦できないから」というので大物に挑んでいる高短の女学生の助っ人に来ている彼女の恋人らしい四年制大学の工芸専攻の学生を叱りつけました。「彼女の仕事に手を出しちゃ駄目だ。君は彼女を助けてるつもりだろうが彼女の学習・研究の邪魔をしてるだけなんだぞ…」と

金属工芸の先生方も時間が売るほどあれば私に何度も失敗をさせて私を金属工芸の技法の入り口ぐらいにまでは導いて下さったかも知れないと思ったりもしています。しかし、キーホルダーや指輪の失敗は、失敗した漆をサンドペーパーで削るようなことでは駄目であって、ゼロからの再出発になってしまうので、とてもそんなことは出来なかったのでしょう。

経営学の先生の研究室の机の上にビッシリと朱が書き込まれた学生の答案が積まれていました。

「えーっ。先生はいちいちこんなに丁寧に朱をいれておられるのですか」

「うん。○×△を付けただけでは学生に力がかからないからね」

経営学も学生は失敗をすることによってこそ身につけていくのですが、こちらは漆塗りと違って「駄目！やり直し！」と言っただけでは学生はどうしたらいいのか、動きがとれないでしょう。正答は教科書を見ればわかっても間違いの原因の指摘や正解への考え方の指針があつてこそ学生は力をつけてゆくのでしょう。

体育の先生は実技の授業展開だけでなく成績の評価も自己管理に任せておられました。

高短の先生方の多くは学ぶとは学生が自力で行うことだとの考えに徹しておられたように思います。

四年制の大学に移行しても、こうした考え方が持続することを祈りたい。

高岡短期大学に勤務して

第5代副学長 高橋一之



私は平成7年（'95）5月から同9年（'97）12月までおよそ3年間高岡短期大学に副学長として勤務させていただきました。このたびは4年制大学に昇格して富山大学芸術文化学部になられるとのことでもことにめでとう

ございます。

高岡は私の生まれた大分県と意外に文化面でも親和性があり（大分は瀬戸内海を通して京都文化に近い）、在職中は野外劇「万葉夢幻譚」に前田利長役で出演したこと

平成7年(1995)

主なできごと

(2.10)学内情報ネットワークシステム TNC-NET(Takaoka National College NETWORK)が稼働。(3.20)平成6年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行。(4.1)専攻科(1年制、1専攻)が2年制、3専攻(産業造形専攻・産業デザイン専攻・地域ビジネス専攻)に再編改組されるとともに、学位授与機構が定める要件を満たす専攻科として認定される。(4.10)平成7年度入学式を挙行。

など楽しい思い出も多いのですが以下大学について記せば次のようです。

1 4年制昇格問題

北日本新聞「副学長に就任されて4年制昇格問題にどのように取り組まれますか」

高橋副学長「現在は設置されたばかりの2年制専攻科の充実に取り組んでおりこれにより全体のレベルアップを図りたい」

以上が私のファイルに残されていたマスコミとの平成7年就任直後のインタビュー冒頭である。地元高岡市産業界の希望が強かったことを窺わせる質問であるが、答弁になってなくて冷や汗ものである。当時、この問題は文部省の意向などもあり解決が難しく答えにくかったと思う。

地元高岡市当局も4年制昇格問題には積極的に取り組まれていた。佐藤高岡市長と新年賀詞交換会で同席になったときなどはかなり詰め寄られて宮本学長に助けを頂いたりしたものである。

時代は変わり、国立大学の法人化と大学の統合再編という追い風に乗って、大学関係者の努力が実り4年制移行問題の実現となった。深甚なる敬意を表したい。課題は多いと思うが新学部へのさらなる発展を願うものである。

2 大学開放センター

大学は一般社会権力と離れて研究活動ができるよう自治が保障される反面、社会から孤立し社会の支持を失う虞がある。

高岡短期大学ではこの点に早くから思いをいたし大学開放センターを設置し地域社会に貢献するよう努めてきた。特に工芸関係の教官や学生が中心となつての展示会は工芸の町高岡ならではのものではあったと思う。思い出するのは北日本新聞社での卒展の会場で辛口の批評していたとき当の学生が後ろにいて素人なのに知ったかぶりして

いる自分に気づいた。恥ずかしくまた学生に申し訳なく思い、後で反省することしきりであった。最近坐禅会に参加しているが今なお人生の修行は遅々としてはかどらない。これからも人々に感謝し、謙虚な気持ちを大切に暮らしたいと思っている。

大学開放センターではセンター長を勤めさせていただいたが、社会との相互交流型のパートナーシップを築くのはなかなか困難であった。「現代の高等教育」…地域社会と大学の交流…に原稿執筆を依頼され「健筆を振るってください」と期待され、悪戦苦闘したものである。協力してくれた松田事業課長に感謝したい。

3 大連外国語学院への留学生派遣

日本地図は中部地方を中心に半径2000kmで描かれている。これを富山県中心に描けばユーラシア大陸は隣県のごとく身近になる。環日本海構想の出発点はこの中心の取り方にあると思う。富山県当局はこの構想をもとに県勢の発展を期していた。

このような背景の下、宮本学長は国際交流の一環としてまた語学教育の必要性から中国語コース学生の中国の大学への留学制度を導入すべく構想中であった(大連外国語学院からも日本人留学生の募集をすすめるため担当の先生が説明に来学されたりしていた)。

このようなことから私と中国語担当岡田助教授、会計課長が同大学をはじめ中国の留学生事情の視察に出張を命じられた。岡田先生の中国語は流暢そのものでタクシー料金を負けさせるほどであった(大連空港のタクシー料金は当時、話し合いで決まるというスタイル)。中国の大学の生活環境はいまいちの感があつたが百聞は一見に如かず中国文化の香り濃く宮本学長の決断により平成9年('97)留学制度の実現となり第一期生を送り出した。中国留学修了生の活躍と中国語コースの発展を祈りたい。

(注)役職は平成7～9年当時のものです。

回 想

高岡短期大学が、この度4年制大学に衣替えされることになりましたことを、まずもって心からお祝い申し上げます。

記念誌編集委員長から執筆依頼を受けました趣旨は、

元事務部長 木野光郎

「今まで表に出なかった本音、懐かしい思い出、辛かった話など…」ということであったことを前提に話を進めて参りたいと思いますので、読まれる方もそのつもりでお読み頂きたいと思います。

平成5年7月1日のことでした。私はこれまで勤務していた東北大学から、高岡短期大学事務部長として転勤を命ぜられた訳ですが、私は密かに「シメタ！少しはのんびり出来るかな？」と思ったのです。それは、これまでの勤務があまりにも忙しく、過酷なものだったからです。高岡短期大学については、「開学して未だ10年で、10月には開学記念式典が予定されているようだ」という程度の知識しか持ち合わせていなかったのです。着任前に事務引継ぎのため、高岡短期大学に伺った時のことです。前事務部長であった山崎さんは、「木野さんが後任として来てくれることになって良かった、良かった。宮本学長がお喜びになる」と盛んに嬉しそうに話すので、何事かと不思議に思えてなりませんでした。良く良く話を聞いていくと、高岡短期大学では今、懸案事項をたくさん抱えていて、そのいずれもが「予算」に関係するということです。そして、木野さんはこれまでの経験から予算関連の実務に強く、きっと懸案事項を解決してくれるであろうことから、宮本学長もお喜びになる、ということでした。

懸案事項を具体的に聞いていくうちに、楽が出来るなどと喜んでいる場合ではないと思うようになりました。懸案事項のいくつかを列挙すれば①専攻科の修業年限を1年から2年に拡充し、学位授与機構を活用して4年制大学を卒業したと同等の学位が受けられるようにする②校舎の大幅な増築を行う③教育用コンピュータのレンタル料の予算化、などでありました。いずれの事項も予算的には困難を極めるであろうことは、過去の経験から明らかでした。そうは言っても、いまさら転勤の内定を取り消してもらえるわけでもなく、肩を落として一先ず仙台へ帰っていったのでした。

いよいよ着任して最初に待っていた仕事は、10周年記念事業の具体的な準備でした。しかしこれは既に大枠が決まっており、私の出番はほとんど無かったのです。それでは私は何もしなかったのかと言うとそういう訳でもないで、若干の事柄を記しておこうと思います。記念事業に関しては、平成5年刊の「高岡短期大学十年史」に詳細が記されておりますが、それにも出てこない程度の事柄ではありますが、当時、記念品の一つとして「テレホンカード」の配付が予定されていました。私はあまり気が向かなかったので、これを「紅白の饅頭」に変えてしまったのです。勿論関連する会議に諮った上での

ことですが、記念品としては立派な「朱肉入れ」があるので、あえてそれに加えてテレホンカードを作成することもあるまいと考えたのです。それよりも在学生全員に紅白の饅頭を配付して、学生と一緒に開学10周年を祝いたいと思ったのです。もう一つは売店で販売していた大学の絵葉書を増刷することでした。開学当時作成して売店で販売していた絵葉書も遂に在庫が無くなり、このままでは販売が出来なくなるということです。しかしそれほど売れている訳でもないことから、絶版になってしまふということでした。なかなか良く出来ているし、完全に無くなってしまふのも寂しいと思ったのです。そこで、ある仕掛けをして増刷し、引き続き販売できることにしたのです。

記念品と言えば、富山県知事からの記念品についても述べておきたいと思います。富山県庁から、高岡短期大学が10周年を迎えるに当たって、知事から何か記念品を差し上げたいと思うが何が良いか、との非公式な打診があったのです。ある記念品を具体的に提案されたのですが、大学のある特定の専攻分野に係る品であったことから、変更をして頂きました。そして最終的に頂戴したのは、高岡市在住の版画家佐竹清氏の作品で、万葉集で伴家持が詠んでいる次の歌をテーマにしたものです。

馬並(うまな)めて いざ打ち行かな

渋谷の 清き磯廻(いそみ)に

寄する波見に

(3954)

作品は、大学の正面玄関に入って2階へ上がる階段の吹き抜けになった場所の壁に掲げて、大学に来られるお客様に大学の立地を説明するとともに、地域との連携を標榜する大学の開学精神の一つを説明するのに大いに役立ちました。

十年史の編纂にも随分意を払いました。着任して最初に、集中的に、かなりの時間を掛けて取り組んだのは、このことでした。どんどん原稿が寄せられて来中、すべての原稿に目を通しました。高岡短期大学のことを何も知らない私が読んで理解できないのは、必ずしも良い原稿だとは言えないのではないかと考えたからです。結局、随分修正して頂きました。勿論、原稿作成者には十分説明して、完全に納得してもらった上でのことは言うまでもありません。大変な作業でしたが、そのお陰で10年分の大学の歴史を短期間で理解することが出来たので

平成8年(1996)

主なできごと

(3.19)平成7年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行。(4.8)平成8年度入学式を挙行。(11.19)中国・大連外国語学院と友好協力関係に関する協定書を締結。(12.25)インターネットでホームページを開設し学内情報の発信を開始。

す。このことは、この後多くの懸案と取り組むのに大変役に立ちました。

さて、懸案であった専攻科の拡充(年限1年→2年、学位授与機構との連携)は、予想どおり大変な難問でした。まず、文部省の担当官に鋭明して理解してもらわねばなりません。当初、幾ら、どう説明しても納得してもらえません。担当官は、「トンネルの先に針の穴くらいの出口しか見えません」と言うのです。会計課長を伴って何度も何度も説明に行きました。行く度に難しい宿題が出されて帰ってくる有様です。ある日、文部省から帰って難しい宿題にどう答えればいいのか、半ば途方に暮れながら高岡市内を自転車に乗っていたところ、歩道に生じていたコンクリートの段差に前車輪を取られて転倒してしまいました。その際、額は血だらけになり、身体のあちこちにひどい痛みを感じました。あわてて宿舍の近くにある整骨院で診てもらいました。先生は、「当院でも治療は出来るが、あなたは多分西洋医学による治療をお望みでしょうから…」と言って、市内の某外科医院を紹介してくれました。早速その外科医院で診てもらうと、レントゲン写真を見ながら、「肋骨にヒビが入っているほか、左手親指の付け根が骨折している」と言うのです。胸には大きな包帯をぐるぐる巻きにされ、左手にはギブスをはめて三角巾で首からぶら下げられてしまいました。しかし文部省から出された宿題に答えなければなりません。数日して文部省に出向いたのですが、担当官は私の痛々しい姿を見て「どうしたのですか？」と言うので、どうしようかと思ったのですが「実は、文部省から出された宿題のことを考えながら自転車に乗っていて転倒したのです」と言ってしまいました。すると文部省の担当官は困った顔をしながら、「文部省に責任は無い」と盛んに弁明するのです。後になって、言わないでおけば良かったと反省しましたが、時すでに遅しです。

文部省からの宿題への対応は、事務部では私が中心になって行いましたが、各課の協力も受けたことは言うまでもありません。しかも各課は通常の仕事を処理しながらのことなので、大変な負担になったことと思います。私は、事務部全体が一丸となってこの課題に取り組む必要があると考え、ある日事務部全体の係長以上によるアフター・ファイヴの会合を持つことにしました。勿論、費用は各自負担によるものです。この日も文部省へ説明

に行き、会合には間に合うように帰る予定にしていました。しかし、列車の中で会計課長と今日も出された宿題に真剣に取り組んでいるうちに、高岡駅で停車したのに気付かず金沢駅まで行ってしまい、慌てて引き返すというハプニングが起きてしまいました。私の提案で皆を集めておきながら、約束の時間に遅れてしまうことになり、平身低頭平謝りだったことは申すまでもありません。

その後紆余曲折がありましたが、文部省の理解がほぼ得られて、次に学位授与機構との協議が始まりました。機構との協議も大変厳しいものでしたが、教育の内容や教員の適格性に関する事柄が中心で、従って学長が実質的に対応されましたので、私は専ら連絡調整が主な仕事でした。

専攻科の拡充に当たって、文部省から出された宿題の一つに“入学志願者数を何名と予測してその根拠は如何”というのがありました。全国の公私立短期大学の関連学科・コースの情報をことごとく調べて、それぞれの進学予想などのデータをコン



自家栽培のスイカにご満悦の筆者

ピュータによる統計的処理を行い予測しました。苦勞のかがあって、後に実際の志願者数が私の予測したものと完全に一致した時には、我ながら感動しました。

このように苦勞をして誕生した現在の専攻科は、この度の4大化に伴って消滅してしまう訳ですが、無駄であったとは思っておりません。当時、地元の各方面から高岡短期大学の4大化の要望が強く、私は良く色々な会合に出る機会がありました。その度に私の基本的なスタンスとしては、「足腰を強くしておけばいつか必ずそのチャンスはやって来る」というものでした。そして、その後ほぼ10年間の、先生方を始め関係する多くの方々のたゆまぬ努力が、今日の4大化へと繋がって行ったのだ

平成9年(1997)

主なできごと

(2.22)第1回短期語学研修を大連外国語学院で実施(〜3.19)(この後、毎年度実施)。(3月)専攻科棟の竣工。(3.19)平成8年度卒業証書授与式ならびに専攻科修了証書授与式を挙行。(4.8)平成9年度入学式を挙行。(11.5)ラハティ・ポリテクニクとの友好協力関係に関する協定書を締結。

と思います。そして難産だった専攻科は、足腰を強くするための環境として、その役割を立派に果たしたと思っています。私の肋骨と手首の痛みも、最近になってようやく癒えたような気がします。

次は、校舎の大幅な増築についてであります。これも大変な難題でした。文部省文教施設部の関係課へ何度も何度もお願いに行きました。しかし、開学して未だ10年でなぜそんなに建物が不足しているのか理解できない、ということでした。しかも各国立学校では未整備の建物が膨大な面積にのぼり、とても高岡短期大学にまわる予算は無いということです。結局、概算要求のヒアリングと言って、7月に文教施設部の幹部に最終的に説明する日の前日まで、担当者には納得されないまま当日を迎えました。その日、他の全国の国立大学ではほとんどが、1級建築士の資格を持つ施設部長が説明をします。私は恐る恐る説明会場に入り、幹部を前にしましたが、その時は腹を決めていました。学長を始め各学科から出されていた強い要望に背中を押されながら、説明を始めました。しかし、私にはある武器(?)がありました。かつて文部省に勤務していた時、全国の公共のスポーツ施設や学校の体育施設の一部を整備する仕事を、かなりの部分任されていました。整備計画の立案から大蔵省への予算要求の説明、予算の執行が主な仕事でした。その時の感覚がよみがえり、自分で言うのはおこがましいのですが“水を得た魚”のように、とうとうと鋭明を始めたのです。説明が進むうちに急転直下幹部の理解を得ることとなり、後日正式に予算が認められたのです。しかもヒアリングの際は、「全国の施設部長の誰よりも説明が上手く、大変良く理解できた」とのお褒めの言葉まで頂戴したのでした。増築が認められたのは、床面積にして約2000平方メートルです。当時、困難を極めた理由の一つに、4年制の国立大学には教員数・学生数・学問分野などによる整備の基準が定められていたことが関係していると思います。しかし、国立の短期大学は全国で2校だけであるため基準が定められておらず、「積み上げ方式」と言って教育・研究上必要な面積を個別に算出して積み上げていく方法が採られていました。そのために、必要かどうかの判断をするに当たっては、大変困難な事情があったのです。必要性を説明するための膨大な資料を作成するに当たっては、会計課のみならず各課の諸君に大変なご苦労をお掛けしたことにあらためてお礼申し上げます。

次は、教育用コンピュータのレンタル料の予算化についてであります。当時、教育用コンピュータは大学創設時に購入した機械で、かなり陳腐化していました。コンピュータというものは年々進化が著しく、レンタルをし

て一定年数経過の都度、最新の機械に更新するのが得策であることは常識となっていました。しかしそのことは、多くの国立大学や国立の研究機関のみならず全ての政府機関がレンタル料を必要としていたため、大蔵省は予算の肥大化を防ぐためにレンタル料の総量規制(個別の審査に加えて政府全体の総額でも厳しい審査を行って予算の増加を抑制すること)を実施していたのです。そのためにこの予算の確保には非常に厳しいものがありました。幸い、文部省の担当課や予算関係者の理解が得られて、レンタル料の予算化が実現しました。時あたかも簡便で性能の高いOSに加えて、各種アプリケーションソフトが世に出回り、国内が沸き立っていた時期でもあり、誠にタイムリーであったのです。



モチノキ(平成17年7月)

最後に、高岡短期大学の環境整備について若干ふれておきたいと思います。イタリア風建築様式を取り入れたと言われている瀟洒な校舎に加えて、緑地を多く確保したゆったりとした敷地が私は好きでした。ある時、国の景気浮揚策として大規模な公共工事の補正予算が組まれることを知った私は、大学の敷地の空き地という空き地に全て木を植えて、鬱蒼とした森を作ろうかと思ったことがあります。民間のある植林の専門家に相談すると、「この大学は地域に開かれた大学として、減多やたらに木を植えて外部から閉鎖的になるのはいけないのではないのか」と言われたのです。民間の人でさえ開かれた大学を目指して施設整備が行われていることを知っていたのに、そのことを理解しなかった自分が大層恥ずかしい思いをしたことがありました。結局、敷地の南西の角にある開放広場で、当初の施設計画で予定されながら予算の都合で実現していなかった場所に、大きなモチノキを1本植えることにしました。その後どうなったか、あれから約10年、今頃は枝葉も茂り夏の日差しの強い日には学生が日陰を求めて三々五々集まって語らっているでしょうか。また、大学には図書館前の中庭に大きなタブノキ(万葉集で詠まれたツマナミはタブノキとも言われている)が1本あるのをご存知でしょうか。

礎(いそ)の上(うえ)の つままを見れば

根を延(は)へて 年(とし)深からし
神(かむ)さびにけり (4159)

このタブノキの大木から、開放センターと体育館の脇を
通って駐車場に抜ける小道の両側には、サザンカの生
垣とケヤキ並木があり、私にとってとても好きな道でし
た。この道は大学を開放する際、他の建物内を通り抜け
しなくても済むようにとの配慮から、地域住民のアクセ
ス道路として計画されたものと聞いております。

ところで、大学が立地する高岡の地は万葉のふるさと
としての風土と文化が、今も脈々と生きつづけておりま
す。私は大伴家持が詠んだ「かたかご(カタクリのこと)」
の花を何とかして育てたいと思い、大学の敷地の南西の
角で道路に沿って植えられている雑木林の片隅に、カタ
クリの球根を植えました。球根は高岡市役所から個人的
に購入したものです。

もののふの 八十(やそ)をとめらが
汲(く)み乱(まご)ふ(う)
寺井(てらい)の上の かたかごの花 (4143)



ツママ(平成17年5月)

毎年春になると、越中国の国庁の跡とされている勝興
寺の境内に咲き乱れるかたかごの花のようになれば良い
なと思いながら植えたのです。しかし春を待たずに転勤
することになってしまいました。平成7年12月1日のこ
とです。その後、このかたかごが定着したという話は聞
こえてきません。多分、根付かずに消えてしまったので
しょう。もう10年も前のことです。

私は転勤に伴って高岡の地を去るに当たっては、家持
が詠んだ次の歌と想いをダブらせていました。身のほど
知らずと言われても仕方ありませんが、立場も 高岡
在任年数も異なることを重々承知の上でのことです。

しなざかる 越(こし)に五箇年(いつとせ)

住み住みて

立ち別れまく 惜(お)しき宵(よい)かも (4250)

その後、私は岐阜大学を経て新潟大学において定年を
迎えました。定年退職後は、福島市で「晴耕雨読」の生
活をしています。文字通り、晴れの日には野菜を育て、
雨の日には読書三昧です。また、健康維持のために太極
拳の教室にも通っています。

近年、大学を取り巻く環境には益々厳しいものがあり
ますが、富山大学の新学部に移行した後も、「芸術文化
学部」というそのユニークさを生かして、富山大学の中
で存在感を示してほしいと願っています。「富山大学芸
術文化学部」の、そして「富山大学」の栄光を祈りなが
ら筆を置くことにいたします。

引用；本文中の万葉歌は、高岡市万葉歴史館編集の「越中万葉
への誘い」(平成4年4月1日発行)から引用させて頂きました。

高短讃歌と単身赴任

「高岡短期大学十年史」という冊子は今も手もとにあ
る。題字は、宮本匡章学長の筆である。高岡短大(高短)
とのきっかけは、11年目の後半('94/1)に石井栄一先
生からであった。

単身赴任ならということで家族との折り合いが付き、
江村稔先生(東大教授)の推薦状を持って宮本学長にお会
いした(江村、宮本教授は共に会計学者)。その後、教授
会を経て最終的に文部大臣と謝野馨氏の辞令を受けた。

5年半の高短生活は、大伴家持の越中国府時代と同じ

元経営実務専攻教授 鶴田彦夫



期間になったが、学長の宮本先生は退職し蠟山先生と二
人の学長に仕えた。しかも、50名ほどの教官の一員とし
て過ごしたので、お金では買えない充実した期間であっ
た。教科目は、本科が「企業会計論」「税務会計論」、専
攻科は「税務会計特論」と「管理会計論」であった。

なお、会計学研究で専攻した私の研究室の学生は卒業
時は異なるが延べで、本科ゼミ生37人、専攻ゼミ生3人
であった。

高短は、誰一人私語する人もなく、質的に高い学生と

の知的交流は刺激があり、毎日が喜びであった。

校務として、平成8年度より平成10年度まで学生生活委員会の委員長を学長指名で受けたので、緊張して対処した。新入生合宿研修会・球技大会・創己祭・サークルリーダー研修会などの行事と奨学金希望者の選定会議などと結構、学生課から追い回された。しかし、新入生合宿やサークルリーダー研修の24時間行動で多くの教官および事務官のお世話になり知己を得た。また、学生生活委員会の延長で北陸地区の大学や全国の国立大学の「厚生補導研究会」に代表として参加したので、各大学の学生事情にくわしくなった。

社会的活動というより開かれた高短の一員としては、青年会議所や青色申告会での講演、商工会議所で簿記講師があつたり、「藤子・Fワールド」の作品を基に街、人づくりをする「夢たかおか実行委員会」の初年度委員長役があつた。これは市役所や市民、企業やマスコミをまき込んだ大掛りのものである。半年後の9月23日おとぎの森で「'99夢王国祭」が盛大に行われ、北日本テレビや富山テレビに放映、翌日の新聞にも載り一定の成果を得た。

本当に短い期間であつたが、高短を中心によく動き回つたものである。飛行機があるとはいえ、東京で5回ずつ年に2度つまり10回出張の講義もあつた。(富山大は、引き続いて今も集中授業をしている)。

旅行も富山ばかりではなく福井や石川にも金沢工大や金沢経理の先生のお陰で各地を出発した。北陸の神社や寺はほとんど制覇した。

スキーは、倉田先生や蠟山先生などと白馬を中心に各地へ出掛けた。テニスは、ゼミ生に立ち向いコンパの前に汗を流した。好きな映画も上映館の都合で富山市や金沢市に向つた。まあ、これも単身赴任の身軽さである。

研究では、研究費予算で多くの雑誌や図書を購入し夢中で読んだ。先達の理論を勉強してから証拠集めと考察をして紀要や学外の雑誌に投稿した。宮本先生や蠟山先生からは、とき折り研究上の助言を得た。そのせいか、「日本産業が乗り越える三つの波」という論文が「実業の日本」('95/8)に掲載されたり、PHP 研究所からの「連結会計」('99/7)の図書では、日本橋丸善のベストセラーとなり日経ビジネス('99/8/9)に紹介されたりもした。

忙しさとヒマがバランスしているような5年半であつたが、同僚の滝沢・森田の教授とは三人一緒の時、また二人だけで酒と魚を求め高岡近辺を彷徨した。論文査問委員会のとき「紀要」編集長の横田教授と話し合いがあつ

たのをきっかけにその後が進んだり、吉田・久保・立浪の各先生には何かと話をした記憶がある。普段は交流は少ないが、新入生合宿やサークルリーダー研修のさい話したのをきっかけに進んだ教官も多い。夢たかおか関係では、石橋・松嶋・北林・二代目委員長の垣内先生それに佐藤市長や市議の方々その他として、公認会計士の金田・浜田・広島、法人会の立浪、青色申告会の大野、商工会議所の村本・中島・川口、高岡税務署の3人(代)の署長と総務課長、三協アルミの金森、トナミ運輸の杉岡、北陸経研の酒井、ポリテクセンターの丹羽、瑞龍寺保存会の吉田彦夫(鶴と吉の一字違い)、富山新聞の深川・山本、北陸中日の大森、高校野球の川岸、評論家の松原、法科大の菅野・朴木、伏木の金子、末広の松田(敬称を省略した)と順不同であるが名前と顔が浮かんでくる。多くの人々に立ち合わせてもらったことを財産だと感じている。

さて、高短を含め国立大は平成16年4月「国立大学法人〇〇大学」として再スタートを切つた。高短も富山大と統合する。誠に残念であるが政治や時代が求めたのであろう。

広く地域社会に対して開かれた特色ある高短であり、私の古里ゆえ、尚更、今後が心配である。三大学が統合した富山大学は、規模が大きく小回りが利かない恐れがある。

この5年半の富山県、そして住みよい高岡市は、地味で知名度の低い地域である。しかし、私には人に知られていないのを幸いにかけてコツコツとやって「自分たちだけでももっともっと豊かになってやるぜ。へっへっへ」と笑っているようなしたたかさを感じる。富山県民は名より実をとる堅実な人々である。

四季の変化も厳然たる事実ですばらしい。高短から二上山ラインの景観・コシノヒガンザクラの古城公園・県花であるチューリップのじゅうたん・かたかご(堅香子)の花の万葉歴史館や勝興寺・紅葉の弥陀ヶ原、さらに自慢の氷見線がある、あの雨晴海岸からの立山連峰の眺めと続く。ブリ・タラ・甘エビ・シロエビ・ホタルイカ・バイ貝・ベニズワイガニなどと銘酒の立山で飲むひととき、変化に富んだ自然と豊かな水を持つ富山県だと感ずる時である。

最後に覚えた富山弁をひとつ「鶴田先生の授業ちゃ、厳しいけ」、「なあん、厳しじゃないけど、むずかして、聞いとっと、だやくなってくるやわ」。

(いま、松蔭大学経営文化学部教授)

思い出の中から

名誉教授 谷口義人

2004年3月に教育現場を離れて、私は自分の書籍・雑誌そして資料等の整理を始めましたが、今に至ってその作業が終わっていません。何故かと言えば、本棚や収納場所を作ってからなのです。

在職中毎日あくせくと動き回っていた生活は、本当に自分がなすべきものだったのだろうか、いま私はそれまでの生活を少し客観的に見られるようになってきました。次々と仕事に追われている限り、こうしたことを考える時間はなかなか見い出せなかったのです。教育現場から完全に切り離されたからこそ、完全に自由になり、完全に孤独になり得たからこそではないかと思います。高岡短期大学での教育実践という私の経験世界から専攻科産業造形学科について少し語ることにします。

平成7年に2年制の専攻科が宮本元学長のリーダーシップがあって設立されました。大事な産業造形学科のカリキュラムは前年に検討を行い、その後文部省とも打ち合わせた経緯から、教育目標に沿って系統的に組織された教育計画であり納得のゆくものでした。設立当初私は中村先生と、専攻科産業造形専攻をリードする重い役割を担うことになりました。もともと産業工芸学科は4専攻で出発したのですが、専攻科設立を期に金属・漆・木材3専攻は産業造形学科としてコース制になり、デザイン専攻は一つの学科として改編されました。産業造形学科は建物に例えるならば、一階建の本科産業工芸学科の母屋があって、その後二階部分に2年制の専攻科を増築したかたちですから、教師の意識は元の母屋の核に帰属し、二階部分は付加されたものとの認識がはたらく構図でした。当時、施設・設備の拡充に努力された宮本先生は私に造形学科各コースが、一体となって融合し教育効果・実績をあげて欲しいと励まされました。他方現場を担当する教師は、それまで担当している授業に、さらに専攻科の授業を担当することは負担増となること、施設が充実したものそれには自ずから限界があって、定員オーバーの学生を受け入れることに難色を示したこと、施設の拡充が計られたとは言え、その配分には学生を受け入れた過去の実績数がひとつの目安となり、各専攻教師間に微妙な心理がはたらいたこと、さらに実習の授業において融合といっても、各専門の基礎実習を受けていない学生と受けている学生を同一の授業で指導する

ことは、教師にとって一つの授業の中で、二つの授業を展開するようなもので過分の負担になる等、現実認識には温度差が生じました。そして指導教官制をとることから、教師間には授業担当時数のバラツキが大きくなり、その不満が残りました。こうした制度的立場は、現実的に対応し解消するしか方法はないと私は考えていました。ですから制度と担当科目の両面から調整を行いましたが、もとより抜本的な解決とはならず、さまざまな問題を抱え込むことになりました。

一方学生に目を向けますと、前年まで1年制の専攻科だったものが、2年制の専攻科に移行したのに伴い、他大学(主に放送大学講座)で規定の単位を取得し、文部省の面接を受け合格し申請しますと、学士の称号が授与されることになりました。この制度を活用するよう学生に何度も機会を設け指導しましたが、1期生は学士という称号よりも、純粋に自己の技術・資質を研く意向が強く、人数は覚えていませんが、学士称号取得者は少なかったと思います。しかし、2期生3期生になりますと、煩雑な制度にも理解が深まり次第に資格取得が定着して行きました。

このような状況のなかで、スムーズに実践に移せなかった物事が、多少なりとも理解されますと、徐々に教師が行動し始め学生も動き出し、それによって少し明かりが見えるようになりました。専攻科の揺籃期にもっとも大事な基盤づくりにかかわってその教育目標が、充分達成されたとは言いきれない私の反省があります。この後は、亡き蠟山元学長の本学・富山大学・富山医科薬科大学の統合をめざす新たな新大学構想が打ち出され、学内外で改革に向かって足並みがそろうことになります。変革の波のうねりの中で、専攻科の培った実績がどれだけ評価を得たのか確かではありませんが、芸術文化学部へと転進・誕生したことは大変喜ばしいことです。

教師なら誰でも体験したことがあると思いますが、ある授業で学生の反応が至ってよく興味を持って理解されたと思っていたものが、次年度同様な手法をとったにもかかわらず、反応は低調で興味を示さなかったケースがあります。教育の実践というのは、ある文脈で有効であったものが、別の文脈でも通用するとは限らない。ある立

場からは完璧と評価された実践が、別の立場では否定されることも少なくないのです。それを個々の学生に対応させますと更に複雑です。私の高岡短期大学での教育経験は、勉強もしましたが進路指導では挫折も面白い、難しいながらやりがいがある仕事、一言でいえば「アポリ

ア」という言葉で言い表されるものだったように思います。それにしても、学生とは楽しい思い出が沢山あります。教師同志の友情にもめぐまれ、励まされ続けた自分であったと懐古しています。

学生と旧友と



理事・副学長 滝沢 浩

○ 高岡短大に赴任して、多くの新しい知人を得た。また、旧友の新側面を知る機会もあった。ここでは、旧友 M 君との新しい出会いについて述べたい。

平成8年度のことである。私は例によって、2年生の前期授業「経営情報システム」の講義時間に、進路活動での悩みを聞き、勝手なコメントを口にしていった。

中に2名、難問をメモで提出した学生が居た。全国ネットの女子アナウンサーに成るにはどうしたら良いか、芸能プロダクションに入りスターの付き人に成りたいのだが、という質問である。いずれも、私の体験や知識の範囲外であり、頭を抱えた。

ある旧友の顔が浮かび、2人に、東京へ日帰りで勉強に行くか、と問いかけた。行きたいとの返答を得て、東京のテレビ局勤務の友人に電話で聞いた。次の木曜日昼過ぎなら居るよ、という一言を頼りに、2人を連れて、東京まで往復した。

狭い執務室に導いた彼は、まず私に向かって、高校時代のことを覚えているか、と話し始めた。大学時代のこと、就職の際のこと、親の勧める大企業を断って、出来たての小企業を選んだこと、仕事が面白く、いつのまにか、成長産業となったことなど、である。

芸能プロダクション志望の学生に対しては、彼は次のように述べた。

「大都会に飛び込み、身も心もボロボロにされるのがおちだから、止めた方が良く、この先生は言うのだろうが、私の考えは違う。人生は長い、そのような無茶ができるのは若い間だ、どうしてもやりたいなら、とびこんで見たらよい。ただし、どうなっても、責任は全て自分で負う覚悟が必要だ」

もう1名のテレビ局勤務希望については、アナウンサー室長を呼び、経験を話して欲しい、と促した。約80名のアナウンサーのトップである室長は、こう言った。

「いま著名なアナウンサーは全て、なぜ私が入社できたの、と不思議に思っている。私もそうです。技術ではなく、その時期、その場、その面接官達に訴える何かを持っていたかどうかなのです」

言外に、このような世界を狙うのは勧められない、という流れであった。

しかし、友人の言葉は違った。

「挑戦したいならば、やりなさい、しかし、四年制大卒が受験の条件です」

高岡に戻り、二人は家族と相談し、芸能プロ勤務志望者は断念して、金融機関へ勤めた。

もう一人は、立命館大学へ編入し、条件を整えて、全国のテレビ局を受験したようだ。

その後、近況の連絡があった。

「思う存分努力をしてすっきりしました。今は全然異なった業界で元気に働いています」

この卒業生は、昨年暮れに、同期3人の夕食会に私を誘ってくれた。子供をご主人に預けて集まる人もいる。いずれも、私が卒業研究を指導する専攻以外の出身者である。

このようなふれあいを持てるのは、気質の良い学生が多い高岡短大に職を得たからだ、とつくづく幸せに思う。
○ 今年の正月二日、テレビで「踊る大捜査線：レインボーブリッジを封鎖せよ」を見た。終わりに制作者として、友人の名前が現れて驚いた。M君は今や社長となっていた。

数年前に、彼が日経新聞の“交友抄”に萩本欽一のことを書いた記事を読んだ。

「欽ちゃん、私はあなたの担当として、テレビの良い点、悪い点、あるべき姿、など多くを教わりました。欽ちゃんは私の大先生です。先生が最近、少し元気が無い様子が気になります。弟子に舞台を任せておかないで、

先生もまだまだ元気に登場して下さい」

政財界他に多くの交友がある彼が、敢えて欽ちゃんを取り上げたことをうれしく思った。

○ 学生と訪問したのはお台場ではなく旧社屋であっ

た。スタジオなどを案内し、帰りに土産の袋を3人分用意してあった。SMAPの写真入りTシャツや、関連グッズであった。私が貰った分は、確か翌週の授業時に、ジャンケンで誰かに渡ったはずである。

尾崎秀男先生の体育観 —後継者の一人として—



保健管理センター所長 立浪 勝

保健管理センター所長として依頼された原稿であるが、保健管理センターの活動については別項目に詳しく紹介してあるので、この機会を利用して専門の体育科教育について書くことをお許し願いたい。

1 初代体育科教授尾崎秀男

犬や馬も走る、人間も走る
しかし、人間だけが
走るためのわざと
走るためのからだを
意図的につくりあげる

しかし、人間だけが
きまりをつくって走る
そして、そのことによって
人間の可能性を追求し
平等と友情とを確かめあい
人間が
人間の主人公であろうとすることに拍手しあう
(城丸章夫)

平成8年3月「鉄棒に魅せられて」と題した最終講義を最後に、尾崎秀男先生(以下尾崎先生)は41年に渡る体育教師としての仕事にピリオドを打った。

尾崎先生の体育観は、最後の勤務先となった高岡短大の授業目標に現れている。一言で言えば、城丸の詩のように、体練・教練と言われた軍隊式の体育に決別し、人類の貴重な財産としての文化として体育を捉えたことである。

2 尾崎の目標

尾崎先生は体育の授業を行うに当たって以下の目標を立てている。

- ・ 笛や号令による指示はしない(音楽を用いる)
- ・ 楽しいという気持ちを大切に(友人づくり)
- ・ いろいろな種目を体験して自分に合ったものを見つ

ける(個性を大切に)

・ 記録の大切さを学ぶ(動きは一瞬、記録は永遠)

本学を去るに当たり、尾崎先生は、後継者である私に目標の継承と体育科教育の発展を託された。そのために、計画をしっかり立てる・意見を堂々と正確に言う・同僚の理解を求める・行動で示す、以上4点の規範を残された。

3 その原点

「原点や経過を知らなければ”今”はわからない、だから歴史を調べる」は尾崎先生の口癖である。

尾崎先生は、昭和39年、当時鳴り物入りで教育界に導入された高等専門学校(以下高専)に富山県公立学校教員を退職して保健体育科の教官として赴任した。きわめて規制の多かった公立学校とは違い、高専は自由な裁量が許され、体育科教育の本格的な挑戦に取りかかった。

尾崎先生の立てた高専における教育目標は以下の通りである。

- 1 どんな時でも10km 走れる走力
- 2 スキーの素養を身につける、冬の野山を移動できる
- 3 海などで長く泳げる
- 4 キャンプ生活の経験(野外での協調)
- 5 クラブに所属する(仲間と共に)

速く走るだけなら馬には負ける、速く泳ぐだけなら魚に負ける、キャンプやスキーに類することは野生の動物には生きる素養である。人間が人間であるためには、悩み苦しき多様な可能性を育てながら生きることが加わらなくては行けない。尾崎先生の5つの目標は、人間として生きる上で生活を豊かにするための「からだ育て」であった。

4 引き継がれる尾崎の体育観

本学では、これまでも本学の学生に合わせた、独自の体育授業を検討してきた。そして、2000年から「心地良い気分になりたくて、からだの緊張をほぐしたくて、そ

んな気持ちから行う運動も生活の中に根づいて欲しい」という願いから、1年次の必修科目体育Ⅰを「からだそだて」、体育Ⅱを「からだ気づき」と位置づけ、「体ほぐしの運動」にも共通する内容を随時導入している。また、2年次の選択科目スポーツ健康科学Ⅰ、Ⅱをスポーツコースと気づきコースに分け、自由にコースを選択できるようにしている。このカリキュラムには尾崎先生と共に創成期の高岡短大の体育科教育を担われた久湊尚子先生の創意工夫が生かされている。

本学体育においては下記の3つを主な目的としている。

①からだを育てる

人間の存在全体(骨格、筋肉、内臓、感覚系、免疫系、思考、欲求、感情などを含めた意味)を「(ひらがなで)からだ」と表す。心地良く生きる為に、“しなやかなからだ”を育てることを目指す。

②からだに気づく

毎日の「からだ」の変化を感じ取る方法を見につける。体調を整え、適切な運動量を知り、より深い自分自身に気づく。

③運動を楽しむ

からだが好きような運動の楽しみ方を身につける。

また、この3つの目的を果すため、授業では以下のような工夫をしている。

・「からだ気づき」の実践

体育Ⅰ・Ⅱでは各一回ずつ「からだ気づき」の教材を取り入れた授業を行っている。またスポーツ健康科学においては気づきコースにおいて「からだ気づき」教材を中心とした授業を行っている。

・レベルに合わせた運動の工夫

球技などは興味や技能に大きな個人差がある。そのため経験の有無の影響を受けないビーチボールなどのニュースポーツを取り入れると同時に、誰もが楽し

めるようゲームのルールを工夫している。また、体力に応じ選択できるよう、ハードコースとソフトコースを設けることもある。

・学生の気づきを大切にしている。

「動きは一瞬・記録は残る」という考えから、毎時間終了後に全員が一行感想を書き、毎回教師がこれに目を通しコメントを書いている。

・仲間づくりの工夫

学科コースの枠を越えた6人から7人のグループを編成し、半年間はこのグループで活動する。グループ対抗戦なども行う。

・雰囲気づくりの工夫

授業中に学生の好む音楽を使用し、励ましや肯定的な言葉かけを心掛けている。

5 これから

2003年4月、久湊先生の後任として着任された澤聡美先生は体育科教育法が専門で、本学の体育科の理念とカリキュラムを活かし、発展させ、芸術文化学部に対応しい授業を作り上げようと研究に努めている。すでに「からだほぐし」「からだ気づき」論に基づく芸術系の学生の基礎教養としての体育科教育の指導計画を練り、授業の中で試みている。その実践の一部は、2004年度高岡短大研究紀要と富山大学教育実践センター研究紀要に報告している。

2005年10月、高岡短期大学は富山大学芸術文化学部に変わるが、高岡二上の地に蒔かれた尾崎先生の「文化としての体育」の芽は、後に続くものによって、今後も育ち続けることだろう。

執筆にあたり、尾崎秀男著の以下の資料を参考にしました。

*体育・スポーツ13年の記録 自家版 昭和51年

*体育・スポーツ8年の記録 自家版 昭和47年

*昭和54年教育資料 自家版 昭和55年

素敵な一期一会

私は、平成2年度から14年度まで13年間体育科目の教員として勤務しました。その間たくさんの先生方や学生の皆さんと素敵な一期一会ができました。これは私の人生において貴重な宝物になっています。皆様への感謝の

気持ちを込め、いくつかの思い出をご紹介します。

体育の授業では、毎年春に大学の後ろにある万葉ゆかりの二上山でオリエンテーリングがありました。グルー



元産業デザイン学科助手 久湊尚子

ブごとに地図を持ち、仲間の自己紹介を兼ねながら山道を歩いて城光寺球場へ向かうコースです。尾崎秀雄教授ご指導のもと、私は迷いそうになったグループをゴールにたどり着けるよう見守る役目でした。登っていく途中、二上山から眺める春の景色は本当にすばらしく、「富山県は素敵なおとこだなあ」と何度も感動しました。その後細い下り道に入ると、道なき道を進んでいくグループが出始める為、教員は先回りをしたり、追いかけて連れ戻したりと、学生達より3〜4倍の距離を走りました。これを5クラス分繰り返すと、最後はもうくたくたです。さすがに「この授業はなんとすばらしく、なんとハードなのか」と驚きました。

そんな私も勤務13年目には学内外を熟知し、立浪勝教授ご指導のもと、独自のオリエンテーリングを企画しました。写真を頼りにたくさんのチェック地点を見つけてゴールするという新入生用高岡短大探検コースです。学生達にも興味を持って取り組んでもらえ、また、他教科の先生方にもお見せしたところ、わからない場所がいくつもあり驚いてもらえました。

公開講座では、平成8年度の講座「心地良いからだをつくらう」が印象に残っています。“からだって実はもっと心地良くなれる”と気づくと、“今のからだは心地悪いのはどうして”と？が生まれ、体も心も楽になります。そんな体験を分かち合った受講生の皆さんと「からだからの癒し研究会」を創設し、大学を退職するまでの6年間様々な活動も行えました。

クラブ活動では、ダンス部、よさこい部とともに踊った楽しい日々が昨日のこのように蘇ります。学生達が作品やコンサートを作り上げていく過程で、葛藤や対立

など困難な問題を乗り越えていく様子は本当に人間的な成長を感じます。「全日本高校大学ダンスフェスティバル(神戸)」や「アーティスティック・ムーブメント・in 富山(全国創作コンクール)」の舞台では、すばらしい内面の輝きを見せてくれました。また、「YOSAKOI ソーラン日本海」では、石川県の千里浜で真夏の照りつける太陽の下、焼けるような砂浜の上を300m 踊り歩くという、まさに限界への挑戦でした。「YOSAKOI とやま」では、たくさんの応援を頂きながら一致団結エネルギーを爆発させました。数々の賞まで頂き、嬉しさもひとしおでした。

私にとって、学生達と苦楽を共にした高岡短大での日々は本当に充実していました。この様な貴重な経験ができたのは、歴代学長をはじめ、体育科目の尾崎教授、立浪教授、総合基礎グループ、産業デザイン学科の諸先生方、関わって下さいました皆様のご指導のおかげと思っております。重ねて感謝申し上げます。

この二上キャンパスが高岡短大のすばらしい歴史を受け継ぎつつ、新しい大学としてさらに輝いていきますよう心より応援しています。



創己祭にてよさこい部と共に踊る

卒業生の回想

『高短のタッキー』

経営実務専攻 平成7年卒業
田村信子(旧姓 数間)

巷でタッキーといえばジャニーズの滝沢秀明クンのことを指すであろう。しかし高短こと、高岡短期大学においてタッキーといえば滝沢浩副学長に他ならない。私は滝沢ゼミ第1期卒業生として滝沢教授の魅力について語りたいと思う。以下、大変失礼ながら親しみを込めて

“タッキー”と呼ばせていただきたい。

タッキーは東京大学卒、野村総合研究所出身という、私から見ると今までお目にかかったことがないような超エリートである。しかし高速道路のインターチェンジをバックして降りてしまうぐらいその行動には驚かされることが多い。当時タッキーはご自身の経験を踏まえ、経営とは、企業とは、戦略とは…などと熱心に語っていらっしゃったが、私はといえば“馬の耳に念仏”状態であった。タッキーの官舎で皆と集まり、高い日本酒を全部開けてしまい、タッキーを真っ青にさせたりしていた。そんなことのほうが楽しかったのである。

実はこの原稿の依頼を受け「ハイハイ」と二つ返事で

引き受けたもののすっかり失念していた。そのときのタッキーの口調は非常に厳しいものであった。あたりまえだ。甘やかすだけでなく、厳しいときは厳しい。これがタッキーだ。

「もっとタッキーの話を聞いておけば良かった」と後悔することもある。しかしタッキーを思い出して“前を向いていこう”と思う。幾つになっても勉強はできる。

回想

木材工芸専攻 平成8年卒業
柳本久美子(旧姓 頭川)

『タビの人』という言葉。県外・他の土地から来ている人、という方言だ。高校まではその言葉の存在すら感じることはなかったが、短大で出会った友人・先輩・先生方は高岡しか知らなかった私の中の日本地図を小さくする程、各地から来ているタビの人達だった。

在学中、作品を作りその考えを話し合い、そして彼らの故郷を起点に各地を訪ねて行くうちに私の中で日本は狭くなっていき、自分のやりたい事ではなく出来るようなことを目標にしていた私の考えは広がっていった。

私の選んだ福岡県でのオーダー車いすの製作という仕事は、作業だけでなく障害のことや法律などを学び、たった一人の為の物作りと使いやすさや美しさ、耐久性と価格のバランスについて考え続けた八年間だった。

退職した今、子供を持つことで気がついた新しい視点を生かし、次は何を作ろうどこへ行こうかと楽しく考えている自分がある。今の時間、生活を常に通過点と考えるようになった、入学前とは違う自分の姿。今、富山に戻ったら私も『タビの人』と呼ばれるのだろうか。

略歴 昭和50年11月17日 富山県高岡市生まれ、富山県立高岡工芸高校卒業 平成8年3月 高岡短期大学卒業(木材工芸専攻)9期生、同年福岡県にて働きさく工房入社 16年3月退社、現在専業主婦一児の母



高短のこと

産業デザイン専攻 平成8年卒業
田中英興

高短に入学した日からすでに十年以上経過した。毎朝満員電車で揺られ意識を朦朧とさせながらも時々学生の頃を思い出す。不思議と辛かった課題や嫌だったことが何ひとつ思い浮かばない。二上さんとの会話も。ただ、あんなになりたくて仕方なかった「都会のデザイナー」となった今の自分よりはるかに贅沢な「時間」を過ごしてたように思う。

高短で僕はいろんな“初めて”を経験した。「裸婦デッサン」「長髪の反骨精神むき出しの教官」「人前でプレゼン」「一人暮らし」「締め切り」「スプレーで車を全塗装」「3日連続徹夜」「泥酔」「畑で野菜&スイカ泥棒」「砂浜で野宿」「タテヤマ」「ラルレロ」。ろくでもないことばかり。とても楽しかった。講義は嫌いだったが欠かさず学校には毎日通った。

みんなとつまらない深夜のテレビ番組の話をして模型を削って、夜は飲めないお酒を山ほど飲んで。成人式も出ないでバテを削った。不衛生と不摂生がたり、皮膚がプルプルにたかれた。

何日も放置されたカップ麺の食べ残しの横で髪を切る人。その横で何食わない顔して地べたで寝ている女の子、お菓子を食べて、楽器を吹く人。いつもジャンプだけは欠かさない子。異常な空間が不思議と心地よい教室。今思えばどんな状況でも体調を崩さない免疫力と納期のためには2～3日は寝なくても平気な体質はここで身についたようだ。あの頃は毎朝ネクタイを締めて満員電車で立って寝るという特技を身につけるとは考えもしなかった。

産デのみんなと過ごした2年間で得たものは不思議と手放せないでいる。少ないが大事な友達と「処分に困りトラウマになった先輩のサニトラ」「羨ましくてこっそり買ったモンキー」。「うちの奥さん」。他にもいっぱいいろいろなものを貰った。

高短と呼べる帰る場所がひとつ減るのは少々寂しいが、不思議と今でもあの時のままでみんなが普通に教室にいるような、そんな気がする。



回 想

専攻科 産業造形専攻
平成10年修了
田村尚子

高岡短大に本科で入学した時は正直、嫁入り前の腰掛のつもりという簡単な選択だったのを申し訳なく思いますが、卒業してからというもの机上の生活から離れた事の悔いが強く、再度専攻科で入学し1度世間に出た私にとって如何に高岡短大の先生方が国内外で活躍されておられて、学内の設備、図書館が充実しているかしみじみ分かったものですから専攻科では社会人を経験した私には長く感じられた90分授業も必死にノートを取って、学士号修得の傍ら、制作に励みました。クラスが少人数の為、先生方との交流も深く、先生自らが砂肝や釣ったばかりの魚を焼かれたり、蕎麦を打って下さったことは楽しい思い出となっております。その時に先生方が話された言葉の幾つかが未だに私の中で深く考え続けるものとなっています。

高岡育ちの私には、高岡短大という名前が無くなるのは自分の拠り所をまた一つ失ったようで寂しい限りですが、再編統合によって他大学には無いものが生まれるだろうかと考えたり、社会に大きく貢献する方が生まれるのかもしれないという期待があります。本科の同期には

伝統工芸で金工と漆芸で活躍している作家が居り、私は彼らには到底及ばなく恥ずかしい限りですが何とかこの世界で頑張って高岡短大の先生方に恩返しをしたいと思っております。どうぞ富山大学となっても今後ともご叱咤下さい。どうかよろしくお願い致します。

思い出を書き始めると本当にきりがありません。もうあれから約10年も経つのかと思うと時の流れの速さに驚きます。

色々な事が公私共にあり、今もまだ必死に日々を送っております。40代を迎えるのはあっという間です。

略歴 平成4年3月 高岡短期大学産業工芸学科金属工芸専攻卒業 10年3月 高岡短期大学専攻科産業造形専攻修了 11年3月 東京藝術大学大学院美術研究科彫金専攻修士課程修了、同上大学院 サロン・ド・ブランタン賞受賞、公募文芸作品、「太宰治賞1999」(筑摩書房)に「涙雨」で入選、筑摩書房 15年5月 ・日本伝統工芸展入選 打ち出し「あげは金具」
現在 ・銀座 AC ギャラリー・彫金教室主宰・工房 “METAL-HEARTS” 代表





三十代の学生生活

情報処理専攻 平成9年卒業
寺井義則

高校を卒業後、地元の地方公務員として勤務して10年目のある日、高岡短期大学へ行ってみないかという話が舞い込んできました。就職してからは「高校時代もっと勉強しとけばよかった」とか「大学へ行って好きなことをやってみたかった」という思いがありましたので、二つ返事をお願いし、社会人特別選抜ということで入学させていただきました。

入学当時はすでに結婚もしていましたが、産業情報学科の120名余りのなかで男性がたった4名という有様に戸惑ったことや、10年ぶりの英語の授業で四苦八苦したこと、動くはずのプログラムがどうしても動かず数日間考えこんだことなどが思い出されます。また、一年生の途中で子供が生まれ、学生生活と子育てというなかなか経験できないようなことにもなりましたが、今となっては楽しい思い出です。

考えてみますと高校を卒業してそのまま大学に入っていたなら、たぶん目的意識もなくルーズに4年間を終えていたことと思いますが、社会人を経験したからこそ、また2年間という期間限定だったからこそ、時間を惜し

んでありとあらゆることに打ち込むことができたのだと思います。この2年間は自分の人生の中でも非常に密度の濃い、忘れることのできない貴重な2年間となっています。

最後に、送り出してくださいました職場の皆さん、支えてくれた家族、そして在学中お世話になりました先生方、子持ちオヤジにも仲良くしていただきました学生の皆さんに感謝するとともに、高岡短期大学が再編後も地域に根をおろして、益々発展されますよう祈念いたします。

略歴 昭和41年6月13日 誕生 60年4月 高岡市水道局に就職
平成7年4月 国立高岡短期大学産業情報科情報処理専攻に入学
9年3月 国立高岡短期大学産業情報科情報処理専攻卒業 9年4月 高岡市水道局に戻り水道施設の設計、監督業務に従事

回想

専攻科 産業デザイン専攻 平成9年修了
谷澤 悦

専攻科の愉快的仲間達のコメント集。専攻科での思い出、印象など。

「皆で徹夜した卒業制作も良い思い出で、とても楽しい時間でした。」

「自ら学ぼうとすれば、時間も環境も十分にあり、もっと色々なことを学べたかもしれません。」

「卒業してから、後輩達の『課題』の様子を新聞などで目にすることがありますが、当時は苦勞した『課題』なのに、またやってみたくなったりします。」

「喫茶店がもう無いと聞いて、残念です。焼肉ピラフ、美味しかったのに…。」

「先生によく言われた『無い知恵しほって、ちゃんと考えろよ』という言葉が今も時々頭に浮かび、励まされます。」

「思いがけず頂いた2年間で視野が広がりました。」

「誰よりも提出物の提出が遅かった私が、今こうしてデザイナーとして働いているのは、やはり4年間学んだことが生かされているのだと思います。」

「初の2年制の専攻科で、とりあえずあてがわれた教室が物置に限りなく近い部屋だったことには驚きましたが、意外と居心地が良かったです。」

「先の2年間で学んだ様々な項目から、自分のこれからの方向性を絞り込むには絶好の機会でした。」 以上



略歴 平成9年以降 富山県内生花店勤務フラワーデザイナー
15年 社団法人 JFTD フラワーデザイン競技会全国東京大会準優勝
17年 社団法人 JFTD フラワーデザイン競技会全国長野大会出場予定



回想

専攻科 地域ビジネス専攻
平成10年修了
坂下真理子(旧姓 新保)

私が高岡短期大学に入学したのは、もう今から十二年前になります。今でも充分綺麗な校舎ですが、はじめて大学を訪れたとき、「なんて綺麗な学校なのだろう」と感動したのを今でも覚えています。新しいのは言うまでもありませんでしたが、二上山のふもとにあり、緑に囲まれ、“自然を満喫できるキャンパス”が、私は大好きでした。

「中国語コースがあるんだ、おもしろそうだなあ」と思ったのが、私が高岡短期大学に進学するきっかけでした。何となく興味本位で始めた中国語でしたが、やってみると意外にも面白く、また少人数クラスという特性もあり、一人一人文法からヒアリング、発音までとても丁寧に教えていただけて、毎日楽しみながら勉強できたのが、その後の私の学生生活を大きく変えました。

短大を卒業する同じ年に、学士を取得できる専攻科ができることになり、私はさらに二年間、専攻科に進学し、中国語を勉強することにしました。当時専攻科で中国語を学ぶのは私一人であったため、マンツーマンのご指導をして頂き、時には本科生の講義にも参加させて頂いて、語学の基本を見直すことも出来ました。だんだん中国語の魅力に惹きつけられた私は、一年間休学し中国北京に留学することになりました。思いがけず高岡短期大学には五年間も在籍したことになりますが、いま思えばあつという間の学生生活でした。

設備や学習環境が十分に整えられており、とても恵まれた環境で生活できたことを、私は大変嬉しく思い、また高岡短期大学で勉強できたことを誇りに思っております。

略歴 平成5年4月 高岡短期大学産業情報学科ビジネス外語専攻中国コース入学 平成7年3月 卒業 平成7年4月 高岡短期大学専攻科地域ビジネス専攻入学 平成8年4月 中国北京中央民族学院留学（～平成9年3月まで1年間） 平成9年10月 富山地铁サービス(株)入社航空部空港営業所にてグランドホステス（会社の都合により途中入社のため、在学中に入社となる） 平成10年3月 高岡短期大学専攻科地域ビジネス専攻卒業 平成16年9月退職 平成16年11月 結婚（現在専業主婦です）



回 想

木材工芸専攻 平成10年卒業
開 裕美子

私が花の短大生だったのは、もう7年前のことです。とは言っても、私の短大生活は、華やかさとは程遠いものでした。

私は木材工芸を専攻していたのですが、本格的に実習が始まる1年の秋頃から、段々身なりに気を遣わなくなりました。お洒落をしたところで、機械で木を加工する際に出る大鋸屑で、全身真っ白になってしまうからです。それに、実習は鉋や鑿を使った手加工が中心となるので、頻繁に刃物を研ぎます。刃物を研ぐと、削れた刃の粉が爪の中まで入り込み、黒ずんでなかなか取れません。私はその頃、スーパーでレジのバイトをしていたので、バイトのある日は、正直刃物を研ぎたくありませんでした。

けれどもそのうちに、そんなことはまったく気にならなくなりました。道具は使えば使うほど手に馴染んでいくし、大鋸屑だって木の香りが心地好くて、嫌じゃなく

なりました。

それに、クラスの友達とも、朝から晩まで同じ実習室で苦楽を共にすることで、絆を深めることができました。学校以外でも、課題に行き詰ったときには近くのカラオケ屋でストレスを発散したり、製作が一段落したときには、岐阜の山奥まで遊びに行ったりもしました。

先生方も、私が教わるには勿体無いような素晴らしい方がたくさんいらっしゃいました。

華やかさはなかったにしろ、今思えば、私の短大生活はとても充実したものでした。社会へ出る前の貴重な2年間を、あのような恵まれた環境で過ごすことができ、本当に良かったと思います。

略歴 平成8年4月 高岡短期大学産業工芸学科木材工芸専攻入学 10年3月 卒業 10年4月 株式会社安田創作に入社工場スタッフとして造作家具の製作・取付を行う 12年3月 一身上の都合により退社 12年5月 アート・ケイに採用 絵画の額装、額・画材の販売を行う 14年2月 一身上の都合により退職 14年8月 有限会社荒井建築企画に入社工務・設計の仕事に携わる 15年9月 一身上の都合により退社 15年10月 株式会社安田創作に再入社設計スタッフとして造作家具の製図・打合せ等を行う 現在に至る



回 想

経営実務専攻 平成10年卒業
梅木なつか(旧姓 平野)

「二上山の桜を目指したら良いよね。」

入学当初、友人とそう言いながら自転車で短大に向かったことを思い出します。当時私は魚津駅から電車に乗り、下車した高岡駅から自転車で通学していました。そして私には、通学途中で季節それぞれの印象的な風景がありました。

まず、春の桜。高岡古城公園や二上山に咲く桜の優しいピンク色は、心を和ませてくれました。慣れない道に不安と緊張を感じつつ、「短大は二上山の麓にあるから…」と冗談混じりに笑いながら友人と自転車を走らせた記憶は今でも鮮明に残っています。

次に夏の風鈴。高岡駅では、夏になると高岡銅器の風鈴が鳴り響いていました。その涼し気な音色に耳を傾けると、何とも言えない心地良さを感じました。

そして、秋の小矢部川沿いの細い道。澄みきった空と秋風の中赤とんぼが群れ飛び、私はその道を通るのが好きでした。

最後に冬のバス。冬は天候が悪いため、ほとんどバスを利用していました。ブザーやブレーキの音、揺れ具合などバス独特の雰囲気が懐かしく思い出されます。

このように、高岡の町並みや季節の移り変わりを楽しみながら通い学び過ごした二年間は、今でも心とむ思い出です。

略歴 平成10年3月 高岡短期大学地域ビジネス学科経営実務専攻卒業 4月 YKK㈱入社 14年6月 結婚 16年6月 出産し、現在育児休暇中 17年6月 仕事復帰の予定



回想

専攻科 産業造形専攻
平成11年修了
上田由紀

当時の私は、とにかく夢中で楽しく毎日を過ごしていました。

専攻していた漆工芸の勉強や先生方・友人との交流に対して、自分の欲求を満たすのに一生懸命。しかし、不器用で要領が悪い上に我が人一倍強かったので、考えても悩んでも解決・理解できず、壁にぶつかることが多くありました。

漆工芸の技術や表現、根本的にモノをつくるとはどういったことなのか、自分の持つものづくりの姿勢や意図。自分を支えてくれている人達との関係、そして自分の夢や目標。真剣に考えるほど、よく深みにはまっていました。

今になって自分の頭の中で、少し何か解決した・理解できた……という時が度々あります。それは過去を振り返った時であったり、当時と同じような経験体験をした時であったり。学生時代の私が、現在の私にいつも繋がっているのです。そんな時、高岡短大では本当に多くのことを学び経験を積み、たくさんのよい出会いに恵まれたということを実感します。

「漆かぶれで漆をやめた人はいない、慣れる」漆をさわり始めてすぐ、漆かぶれがひどくて真剣に学校を辞めようかと思っていた私に先生がさりと一言。あの時、医者言葉よりも先生の言葉を信じてよかったなあと、つくづく思う漆歴10年目の今日この頃です。

略歴 昭和51年生まれ富山県入善町在住 平成9年 高岡短期大学産業工芸学科漆工芸専攻卒業(10期生) 11年 同大学専攻科産業造形専攻修了(3期生)、修了後、地元の入善町にもどり、自宅工房にて制作活動をはじめ。県内の企画展やグループ展に参加(「八尾坂の町アート」「高岡クラフトマンズギャザリング」など)公募展「日本伝統工芸・富山展」、「高岡クラフトコンペ」などに出演・入選 現在～制作活動と、海に見える素敵な喫茶店の店員との二足わらじ生活。「漆」の持つ、独特の色・艶・質感を生かした、使い手の生活に溶け込む「漆器」を目指し、制作展開中。



回 想

金属工芸専攻
平成11年卒業
小野周平・奈加子
(旧姓 北川)

私たちは、この大学の産業造形学科金属工芸コースに入学し、卒業した二人です。

たくさんの愉快的仲間ができました。

同じく金属工芸コースに入学した人たちも、私たちと同じように金属初心者から始まって、少しずつ金属にのめり込んでいき、金属大好きになった仲間たちです。

私の記憶では、みんなと金属で遊んでいるうちにいつしかハマっていたという感じです。

金属がというよりも自分を表現したい、ものづくりが好きな熱い集まりでした。先生たちも、私たちが表現したいものを、先生一人一人が持っている知識で表現する方法を教えてくれる、ものづくりが好きな仲間でした。また、サークルやいろんな授業でも違う学科の仲間ができました。他の学科の学生といっても、表現の方法や素材が違うだけで、自分の想いを伝えたい、自分を表現したいという同じ自己アピールの集団であり、そんな愉快的仲間にもまれて、毎日楽しかったです。

自分がおもうままに考え、生きろ大学。

その自分を表現する場所、考える時間、その考え方や生き方に刺激を与えてくれる仲間との出会い、そんなものを与えてくれるこの大学は私たちにとって最高の場所であり、大きな存在でした。自分たちの表現は無限で、自分で考え、つくり出すものには、すごく自由なところでした。

今思えば、もっと自由にもっと大胆にもっと自分を表現すればよかった、それができる場所と環境と時間があったなと思います。

この大学で人生決まっちゃった二人。

そんなふうに大学というものが私たちに与える影響は大きく、出会いは奇跡でありました。本当に大学で人生が決まるのかは分からないけど、この大学で出会った私たちも結婚したりなんかして、それに今でも、ものづくりが好きで、作品をつくったり、男のガレージや家の内部を溶接でつくったりと、あの時、あの出会い、つながってるみたいな感じです。

みんなつながっている。

そんなすばらしい日々もあっという間に終わり、仲間とも離ればなれで、なかなか会えない人もいるけど思い出はいっぱいです。

楽しかったな。

嗚呼、またみんなに会いたいな。

回 想

漆工芸専攻 平成11年卒業
川田 勉

「どんより曇った薄暗い所やなあ。」それが試験のために初めて高岡に来た時の印象でした。そして「もう来ることもないやろう。」とも思っていました。でも予想に反して合格し、バタバタと一人暮らしの準備をして再び高岡へ。二度目の高岡は青く晴れ渡り、白く雪をかぶった立山まで見えました。

学生生活は自分が何をしたいのか、どんな物が作りたいのか、目標も無く、時間を無駄にしながら過ごしていました。授業をサボったり抜け出したりして先生に迷惑をかけ、叱られてました。楽しいこともたくさんあったけれども二年間は苦い思い出です。結局やりたいことを見つけることもできませんでした。

地元に戻っても漆を捨てることができずに勉強を続けていると段々やってみたいことが見つかり、また一年間高岡短大で勉強する機会が持てました。今から思えばもっと真面目に勉強すればよかった、遠回りしたと思っています。

高岡の生活はたったの三年間だけど自分の中ではとても重要なものになりました。出会い、別れ、後悔、目標、大切なものがたくさんあります。今はなかなか行くことができないけれどまた遊びに行きたいです。

略歴 平成9年3月 高松工芸高校卒業 9年4月 高岡短大入学 産業工芸学科漆工芸専攻 11年3月 高岡短大卒業 12年4月 香川県漆芸研究所入所 15年3月 同研究所卒所 15年4月～16年3月 高岡短大研究生 16年4月～ 香川県漆芸研究所 研究員



回 想

情報処理専攻 平成11年卒業
勝間田瑠美(旧姓 吉田)

正直なところ、社会に出てから仕事のあまりの忙しさに、母校に思いを馳せることはあまりありませんでした。在学中はとても楽しい時間を過ごし、また、同級生と会うことも結構あったにもかかわらずです。

そんなある日、高岡短大が富山大学等と統合されるという新聞記事を目にした時、がく然として心中に複雑な思いがよぎりました。私は以前、富山大学を受験し失敗した思い出があります。統合のおかげで以前入れなかった大学に後から補欠合格したような、でもどこか嬉しくないような、そんな捉えどころのないモヤモヤした動揺を感じました。そしてそんなことを考えているうちに在学時の記憶が呼び覚まされてきました。校舎が綺麗だったこと、広々とした前景、先生方や授業風景など…。情報処理コースに在籍し、プログラミングに四苦八苦していたとき、簡単に問題を投げ出さない仲間達の姿勢に励まされたこと、いろいろな考えを出し合って課題を仕上げ深い満足感を味わったこと…。次から次へと浮かぶ思い出に、改めて「本当にいい学校だったな」とつくづく

感じました。その時、合併されることで母校の名前がなくなり思い出がかき消されるような気がした、それが一番のショックだったのだと気づいたのです。市町村合併のような形で、大学名も消えゆく時代なのかもしれない、残念なことに変わりはありません。ただ、高岡短大が大きく成長するのが今回の統合だと信じます。

私は現在、妊娠中。将来、子どもに母校の話をする時があるでしょうが、その時には子どもに胸を張って聞かせたいと思います。高岡短大という学校があったこと。私がそこでとても良い仲間巡りに巡り会うことができ、有意義な学生生活を送れたということ。

略歴 平成9年4月 高岡短大産業情報学科情報処理コース入学
11年3月 同卒業、4月 ソフトメーカー(金沢市)入社 12年9月 退社 10月 中日新聞北陸本社入社

